

# 小田原史談

第100号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21

## 定期総会の報告

鈴木平八

会員の皆様には毎日を元気で過ごしの事と存じます。四月二十七日午後一時より本年度の定期総会を、中央公民館で開かれました。昭和五十四年度の決算書と、五十五年度の予算案も異議なく承認されました。

役員は任期で交替の年でありましたが、会員多数の意見により全員留任と決りました。会員の皆様には特別の御指導と御援助を、お願いする次第であります。次に史跡めぐりの報告をします。

意見により全員留任と決りました。会員の皆様には特別の御指導と御援助を、お願いする次第であります。次に史跡めぐりの報告をします。

五十四年六月十七、十八日  
◎武蔵野史跡と第三回阪東三三観音めぐり  
収入 一、二六〇、〇〇〇円  
支出 一、二三八、四九五円  
残高 二一、五〇五円  
七月八日

### 昭和54年度決算

### 昭和55年度予算

(収入の部)		(収入の部)	
繰越金	377.828円	繰越金	311.398円
市からの補助	24.000	会費	1000.000
会費	733.500	市からの補助	24.000
預金利子	8.390	預金利子	5.000
雑収入	12.900	雑収入	10.000
計	1156.618	計	1350.398
(支出の部)		(支出の部)	
通信費	180.640	通信費	350.000
報印刷代	240.500	報印刷代	250.000
特別原稿料	0	特別原稿料	50.000
講師謝礼	30.000	講師謝礼	50.000
交際費	25.000	交際費	30.000
事務用品	12.530	事務用品	30.000
事務手当	240.000	事務手当	300.000
期末特別手当	50.000	期末特別手当	70.000
会議費	41.550	会議費	50.000
雑費	25.000	特別事業費	50.000
計	845.220	雑費	50.000
残金	311.398	子備費	70.398
計		計	1350.398

## 「後北条氏秘話」を

会報掲載するに当り

香川 政治 (載録)

(三) 氏政後室は 城中で自害か

北条氏政の前室黄梅院は武田信玄の愛娘であったが永禄十二年に二十七歳の若さで病死している。その後氏政が正室を迎えたか否かは一切記録がないので不明であったが、北条氏の氏寺であった伝心庵に現存する過去帳の中に「鳳翔院殿

◎第一回市内仏像仏画見学  
収入 七六、〇〇〇円  
支出 九四、〇〇〇円  
残高 一八、〇〇〇(不足)  
十月十日  
◎第二回市内仏像仏画見学  
収入 五八、〇〇〇円  
支出 八七、〇〇〇円  
残高 二九、〇〇〇(不足)  
十一月十八日、十九日  
◎千葉県史跡と第四回阪東三三観音めぐり  
収入 八八四、〇〇〇円  
支出 八〇〇、七一〇円  
残高 八三、二九〇円  
五十五年一月二十日  
◎静岡方面初詣で  
収入 一三五、〇〇〇円  
支出 一七二、八七二円  
本年度の繰越金 一三五、八七二円  
本年度の残金六、六〇〇円  
合計 一四二、四七二円  
(次年度繰越)  
以上で本年度の決算と予算を報告しました。

奇雲宗祥大禪定尼・氏政公後御前・天正十八年六月二十二日」とある珍しい記事によって、正式に後室を迎えていることが判った。ところが、この後室の死亡の年月日が天正十八年で、しかも秀吉に小田原城を攻められている籠城戦の最中である。ところで、この夫人の死について疑問の湧くところは、氏政の後室と言え

年齢は若く老衰で死んだのではない病死であろうが、果たして普通の病死であろうか。病死としても、籠城戦の最中に死んだというのでは単なる病死とも思えぬ更に突っ込んで考えると自殺なのではないか。

北条氏の系図を見ると、氏政の末子に天正十八年の籠城中に生まれた男子が、戦中なので勝千代と名付けられているが、この子については誕生のことのみ記録にあって、以後一切不明なところよりすると、恐らく誕生後まもなく死亡したものであるらしい。勝千代は恐らく夫人鳳翔院の生んだものらしいからもしそうだとすると、夫人が籠城中に男子を産んで、間もなく母子ともに死亡したことになるので、産後の肥立ちが悪くて苦悶の病死を遂げたか、狂死をしたのではないか。

城中「入らずの間」の謎と云うのは、北条氏が滅亡して直後に、大久保忠世が封ぜられて入城して後、北条氏の亡霊の追迫のために殿中の部屋に法華教を唱読させており、特に「入らずの間」という部屋が、大久保の和尚を呼んで毎月法華教を誦読させている事実があるから、氏政夫人の變死の亡霊を弔った

もの想像するより、他に思い当るようなことがない。

鳳翔院の変死を更に押し詰めていくと、自殺説まで持っていくことが可能である。これより八年前の天正十年武田氏滅亡の際に、氏政の妹が武田勝頼の後室であつて、夫君勝頼が立派な最後を遂げるようにと、夫君に先立つて天目山で自刃したことは貞女の鑑とされて知られているので、氏政夫人も、小田原落城の近きを知って、武田夫人の例にならって自害したものではないだろうか。

大久保家が「入らずの間」などと言って亡霊供養するのは、氏政夫人自害の部屋を指すのではないだろうか。狂死説、自害説いずれが本当かはわからぬが、氏政夫人の死が普通の病死でないことが察せられる。

さてこの氏政後室鳳翔院の素姓についてであるが、氏政再婚の頃は北条氏の全盛期であるから、定めてよい家柄から夫人を迎えていると思われのだが、北条関係の資料には一切なく全く不明である。

近衛家の姫君？  
ところが、ここに一つの問題がある。それは「新編相模風土記」の中の足柄下

郡板橋村の条に、同村に日蓮宗の妙安寺という寺があつて、この寺に近衛家の墓といふものが三基あつて近衛関白家、その子関白尚通、同尚通夫人の三人の院号が刻されている。このよ

うなもの何故に京都から遠く離れた小田原に存在するかと云えば、恐らく北条氏政の後室が関白尚通の娘であつたので、氏政夫人が父母と祖父の供養のために建立した墓碑で、遙拝に供したものであろう、と云うことが書いてある。

これは大変面白いもので氏政後室の素姓を知る上の貴重な資料であるから、この記事を発表したときは大変な喜びで、急いで同寺を訪ねて行つたが、寺はすでに無かつた。近所の人に尋ねてみたら、明治の初め頃、二宮町辺に寺は移つてしまつたということ、勿論目指す近衛家三墳など影もなかつたのである。

非常に落胆したが、そのまま過ぎること数年の後、私がある所で講演中に聴衆の一人から「妙安寺が現在二宮町にあり、近衛家は同寺の檀家である」と云う人が現われてびっくりしたが、その人の案内で二宮町に行つて同寺を訪ねて、たずねる近衛家の墓石が境内に建っているのをたしかめた。

明治初年の小田原藩藩止と維新排仏とのあふりをうけて同寺が荒廃した時、二宮町の素封家神保半輔とい

う人があつて、熱心な日蓮宗の信者で、二宮に日蓮宗の寺がないので、小田原の妙安寺が廃寺同様になつて

いるから、これを二宮に買ひとりとういうことで、有志と相談の結果、神保家所有地、二宮海岸に面した袖ヶ浦と云う所の一千坪を寺院に寄附して、明治十九年に、小田原での同寺の建物をそっくり二宮に移して妙安寺を再興したのである。

そして近衛家三墳の碑石も小田原から持つて来て、境内にそのまま建立したといふ次第であつた。三基の墓碑は自然石、高さ九〇センチ、一〇五センチ、一〇センチで碑面文は

南無妙法蓮華經、後法興院殿準三宮禪閣專儀 永正二年六月十九日。妙法、後法成寺殿準三宮尊儀、天文十三曆八月二十六日。好法、當時大檀那勝法院殿妙安尊尼、近衛殿御前様也。天文二十三年閏七月二十四日。

とあるが、後法興院は関白政治家の法号、後法成寺殿は尚通の院号で、勝法院は尚

通夫人の院号である。北条氏政夫人鳳翔院が、遠く亡き母君の菩提のために、その院号「好安」をうけて好安寺と名付けたのではないかという。

いづれにしても、氏政後室は、小田原戦役の籠城中に死亡したことは確かであるが、その死は自殺か狂死か、また夫人の素姓は近衛関白家の娘か、否か、多くの問題を秘めた女性である

四督姫、池田輝政 夫人となる  
前記したように北条氏直が分かれていた督姫夫人と一年振りの再会の喜びに浸つたのは、天正十九年八月二十七日であつたが、それから僅か百日後に氏直は歿してしまつたのである。

十八歳の未亡人  
さて夫人はその時どうしていたのかというに、八月再会の後に夫人が東に帰つた様子もないし、また父の家康が多数の女房衆を付けて大阪まで彼女を送つたのは、一日や二日の再会で、二人を引き離そうというのではなく、復讐が罪の赦されて大名に復帰したのだから、再び二人に夫婦として生活させるためであつたと思われ、夫人は氏直の病床についていたものと

考える。借老同穴の契りの再会も空しく夫君の急死にあい、遂に彼女は未亡人となつた。その時は十八歳だつたのである。

さて北条氏直には子供がなかつたといふのが通説であるが、実は夫人督姫との間に一人の女の子が誕生している。

氏直に娘のあることは、隨筆「玉滴隠見」に第二十五巻の中にも見えるが「御降誕考」の督姫の素姓を記した中に

「氏直の息女チャウア(茶阿か)姫十三ニテ早世、御位牌ハ山城大徳寺内大清香ト云フ塔中之レ在リ」とある。この娘は母が池田家に再嫁したとき、連れ子として池田家に入り、池田輝政養女として輝政の孫新三郎光政に嫁する予定であつたが、十三才で早世してしまつたのである。

さて、この氏直未亡人の素姓を見ると、彼女の母は徳川家康の数外き側室の一人である西郡の局といわれた婦人で、鶴殿藤太郎長照の妹であつた。鶴殿家は三河西郡地方の南北朝時代からの豪族で、それが徳川家康が滅ぼして、減ぼされた鶴殿長照の美貌の妹を岡崎崎に引き入れて愛妾としたもので、西郡(にしごり)の局と呼ばれ、家康の

寵愛をうけて、永祿八年(一五七〇)九月に二十四歳のとき岡崎城で一女を生んだのが四女である。家康には十一男四女あるが、長女督姫は奥平信昌夫人、次女督姫が北条氏直夫人、三女振姫が蒲生氏秀夫人、四女市姫は不幸にして早世している。

小田原北条家がまだ盛大であつた頃の天正十年に、北条氏直と徳川家康が甲州の若御子(わかみこ)で対陣した有名な事件の直後和陸して、その条件として北条氏政の嫡子北条氏直に徳川家康の娘を嫁せしめる約がととのい、明けて天正十一年(一五六八)八月十五日に盛大な婚礼儀式の中に、督姫が北条氏直夫人となつたのである。氏直の年齢は二十三歳で、督姫はなんと十歳であつた。僅か十歳という幼い花嫁の誕生であつたが督姫の存在は後に大きな役割を果たすことになるので

小田原戦役で北条氏滅亡の時、彼女は十七歳であつたが、夫君氏直が死一等を滅ぼされて生命を保つことになつたのも、みな徳川家息女としての彼女が氏直夫人として存在したからであつた。将来は関東三カ国(武蔵、相模、伊豆)を手をえられて関東太守に返り咲きを予約されていたという夫君が急死したので、それも一

が急死したので、それも一

朝の夢となって、督姫は十八歳の後家となったのである。余りにも若い後家であるので、諸侯の間に評判で「北条後家」と言われたのである。

父家康も吾が娘のこの若き後家を不憫に思い身の振り方を案じていたが、秀吉の方も一種の責任のようなものを感していたのであろう。秀吉の心配で、その頃三州(愛知県)吉田城主(五万石)であつた池田三左衛門輝政が若くして妻を亡くして不便を感じているので、その後妻に入れることになつた。

池田家に嫁し光栄の日日「以貴小伝」に「はじめに北条左京太夫氏直朝臣の北の方となり給いしが、氏直うせられしかば豊太閤のなかだちにて池田参議輝政に嫁し給う。」とある。輝政、督姫の結婚は文禄三年(一五九四)で、輝政三十一歳、督姫は二十歳であつた。

ここに一つ問題になるのは督姫の名のことであるが古い記録を見ると督姫(とくひめ)と云うのと普字姫(ふうひめ)と云うのと二様ある。例えば「御降誕考」には小督姫(おとくひめ)と書き、「夢日記考」には徳姫と書き「寛政重修諸家譜」には督姫となり「以

貴小伝」に普字姫、「池田家譜集成」には富姫(ふうひめ)、「蓮葉院余光記」には御普字様と記してある。徳川家関係の記録にはみな督姫と書き、池田家関係の記録には普字姫と記しているのを見ると、恐らく池田家に嫁してから、北条家婦人時代の有名な督姫の名を忍んで、幼名の普字姫の名を称したものであろうと思ふ。

池田家に嫁してからの夫人には光栄の日が続き、夫君輝政の立身は旭日の昇るが如きであつた。秀吉歿して関ヶ原の戦が起きたとき徳川方として功を立て、次いで慶長八年(一六〇三)家康が征夷大將軍となつて江戸に幕府を開くと、輝政は播州姫路城主に榮転した。表高は三十五万石であるが播摩の外に備前、淡路も領していたので、実高百万石と称せられた。その頃から大名のあいだに、池田候は北条後家をもつて、その背後の光で出世したといふ評判が立ち初めた。

「思ひ出草」という書物によると、池田家の中にそういう評判が立ち「うちの殿様は、大御所様のお姫様をお嫁にもらつたお蔭で出世したのである。殿様より奥様の方が偉いのだ」と云い、家臣、腰元衆まで奥様

の命はよく聞くが、殿様の言い付けは守らないという不安の状態になつたといふ。この時、夫人お普字様が城中に家臣、腰元衆を集めて、夫人自ら訓辭して、我が殿様は、信長、秀吉二公に仕えて以来、槍一筋に身を立てて、その大きい功績によつて今日榮達を遊ばされた徳川家臣なのである。私の如きは、徳川家に生まれた一女性にすぎない。私の為に殿様が出世されたといふことは絶対にない。今

後このような評をたてたり殿様をないがしろにするような言動があつた者は、私は絶対に許すことはできない。と声を大にして一席ぶつたという。これ以来、家臣女房衆もみな君命を重んじ不安の空氣が一掃されたといふ。面白い話である。さて年も過ぎて、慶長十八年(一六四三)に池田輝政が五十歳で歿し。そしてその二年後に夫人お普字姫も元和元年(一六二五)一月五日に四十一才で京都二条城で歿したのである。何故か早い生涯であつた。

池田輝政は子福者で十男五女あるが、うち三男二女は彼女の家生むところである「蓮葉院余光記」に彼女が生んだ三男子について「その一は因幡少将殿、二は備

前宰相殿、三は石州太守殿」と記している。日蓮宗の京都の光了山本禪寺に葬つた。また鳥取の惠安寺にも位牌がある。諡号は良正院智光慶安、池田家では良正院殿、または華光院様と呼んでいる。この人の死にも毒殺ではないかといふ説がある。

(五)松田尾張守の権勢と反逆 天正十八年(一五九〇)小田原戦役の北条軍籠城中に、家老松田尾張守憲秀が敵方に内応して反逆を企てたので誅殺された事件は、小田原落城悲劇中の大話の一場面として有名であるが、松田尾張守とはどんな人物なのか、その謀叛の真相はどうなのか、このことについては従来疑問とされた点に頗る多いのである。

松田氏と云う家柄は、下野押領使俵藤太こと藤原秀郷の子孫と云われる相模秦野氏の十四分家の筆頭で、相模国足柄上郡松田郷に拠つて、同族の河村氏とともに南北朝時代に南朝側に属して大活躍して、史上に「松田、河村党」と呼ばれた(太平記)家柄である。室町時代に西相地域が大森氏の支配下に入るようになつて一時勢が衰えたが、大森氏の拮抗してよく命脈を保ち、明応四年(一四九五)北条

早雲が伊豆から来つて、小田原城の大森氏を倒したとき、時の松田氏の当主松田左衛門尉頼秀は相模武家中で真つ先に馳せ参じて北条早雲に属し、大森氏攻略に功績を挙げた家柄であつた「小田原記」の中に「早雲入道小田原の城に移り玉へは、松田左衛門尉という人あり、是は公方家の忠臣たりし故に、終に上杉の下知に随はで、相州西郡に度々合戦したりするが早雲小田原へ入玉うと聞き大いに喜び、最前に馳せ来たつて一にになる」とこの辺の事情を述べている。

西相模武家のうち最初に來属して協力した松田氏に對して、早雲は大森氏打倒の第一の功勞者として、特別の好遇を加えるようになった。小田原北条家の家臣団組織と軍事編成について記した貴重な資料「小田原原田記」(小田原秘鑑ともいふ)と云う書物がある。その冒頭に、家臣団中で最高の位置にある「御由緒家」といふ記事があつて「大道寺家、多目家、荒川家、荒木家、山中家、有竹家、松田家、右者、早雲寺殿様御草創七手御家老衆の家にて、御家門に準せらる」と述べているが、七家のうち松田家を除く六家は

早雲が関西から東国に下向したときに同志六人として一緒に下向したので、有名な大道寺太郎、多目権兵衛、荒川又次郎、荒木兵庫頭、山中才次郎、有竹兵衛尉の子孫であるから、創業の重臣として特別扱いをうけることになつたのは当然であるが、相模土着の松田氏をひとりこの中に加えて、御草創七手御家老衆として北条家の一族に準ずる待遇をしていけるのはなぜであらうか、同記が松田家の項にのみ割註をして、「松田家は相模出身なぞども、大身に家柄の由緒もこれあるに付き、この列に加えあそばさる」との意味を説明しているのは、松田氏が早雲の小田原攻略のとき、どの武家よりも早く馳せ参じて協力をした功績を高く買われたものに違いない。

これより北条氏が五代約百年にわたつて関東に覇權を握つていたあいだ、松田氏は終始家老職をつとめてよく歴代の当主を輔佐し、各地の戦場でも勲功をあげて、次第に他家を圧して、三代北条氏康の頃から、もう家臣団中の第一人者としての実權を振うようになつて来た。

五代に仕え随一の實力者松田尾張守憲秀は松田家の五代の当主であるが、彼が

史上に姿を現はしてくるのは、氏康時代の天文、永禄の頃からで、その永禄年間

に記されたと思われる前記の「小田原旧記」に草創七

家の「御由緒家」の次に、現時の北条氏の家老八家の

名をあげて、その筆頭に「当時駿州高国寺御城御

預り、松田尾張守」と記しており、また同書の中に

ある。「御旗本備四十八番將衆」には、松田因幡守、松

田築前守、松田兵部丞の名があり、「御馬廻衆」の中

には、松田助六郎、松田新次郎などがあって、一族が

ざらりと要職の列に顔をならべている。

また「小田原旧記」と同じ頃の氏康の永禄年間は編

纂された有名な「小田原衆所領役帳」を見ると、松田

一族の知行高は、松田佐馬助 一七八貫一〇〇文

松田築前守 一〇三貫 一一文 松田因幡守 一〇三貫九七一文

松田兵部丞 八六貫八五八文 松田新次郎 二八九貫六五〇文

松田助六郎 五〇三貫二五三貫とあって総計二、八五四貫

八四三文が松田一族の総所領高であるが、これは北

条氏の家臣団中では抜群の最高知行高であった。そし

て知行地は大半が足柄上郡に集中して、松田郷筋、松

田西分、河村郷、刈野庄三十五ヶ村全域、足柄下郡で

は飯田村、今井村、多古村その他相模国内では高座郡

三浦郡、鎌倉郡に、武蔵国内では多摩郡、高麗郡、入

間郡に、伊豆国では田方郡君沢郡など広範囲の地に散

在していた。「役帳」に松田総本家の知行所に松田左馬助と記し

た尾張守憲秀の名を記してな

いは、左馬助秀治が尾張守の嗣子で、憲秀は松田一

族の総帥ではあるが、永禄元亀の頃入道して家督を左

馬助に譲っていたからであ

って、「旧記」には松田尾張守と記して嗣子左馬助の

名が巻中どこにも見当らぬのに、「役帳」には尾張守

の名が見えず、嗣子左馬助の名で代表されているのは

「旧記」と「役帳」との編纂された年代に多少前後の

差があるので「旧記」の方が数年古いように思われる

「関八州古戦録」の中に、松田氏の由緒を書いて最後

に尾張守におよび「其後北条早雲に属して当時尾張守に至り、君臣相拱

に五代を経たり、始め北条家の長臣は荒木、山中、大

導寺三人たりしが、荒木は

姪乱無道にて逆心の企有り

し故、氏康自身手かけ誅

戮せられ、其の代りに尾張

の守村秀を補せらる。相州

東野、山室、岩崎の三カ所

の要害を兼持して、凡手の

者五千余人を扶助し、南方

随一の腹巨なり」とある。

尾張守村秀は憲秀の初名

で、康秀とも名乗り左衛門

左を称したが、後に尾張守

憲秀を名乗ったのである。

彼の屋敷は小田原城の西

海子(さいかち)御花畑あ

たりにあつて宅地東西八十

六間、南北七十二間に及ぶ

宏大豪壮なもので、永禄二

年に武田信玄が大軍を率

いて自ら小田原城を攻めた

とき、しきりに城下の侍屋

敷を焼いたが、松田屋敷を

焼き残したことを聞いて、

「究竟の家を漏すこと、後

日の批判如何なり。松田も

も定めて威言すべし残念の

至りなり」。(関八州古戦

録)と言つて、馬場美濃守

に手兵を率いさせて、松田

屋敷を焼き払ったことがあ

る。

江戸時代に入つても、そ

の屋敷跡が人々の関心を買

い、寛永十一年(云云)六

月二十三日、三代將軍家光

が上洛の途次、この日小田

原城に宿泊し、自ら足を運

んで有名な松田屋敷跡を見

物している。このような点

からすれば、権勢主家を凌

ぐ程の尾張の守、何一つ不

満のない筈の憲秀が落城す

前の北条家の危機に、何故

に重大恩顧の主家に反逆を

企てて自らを滅し、悪名を

永く後世に残すようなこと

をしたのであろうか。彼の

周辺をつぶさに観察すると

事ここに至つた根深い一つ

の事情があつたことを知る

ことができる。

### (六)不肖の子松田 新六郎の行状

松田尾張守憲秀の子には

二人の男の子と一人の女子

がある。二人の男子は長男

は新六郎政義(秀範とも云

う)、次男は左馬助秀治(直

憲とも云う)末子は郎三郎

秀也であった。娘は津久井

城主内藤左近の妻である。

さて長男の新六郎は武蔵

小川の城主で北条家八家老

の一人である笠原能登守康

勝の養子となつて笠原新六

郎と名乗つて他家に入った

ので、本家は次男左馬助に

譲ることになつて、憲秀自

らは表面致仕の身となつて

入道して松田尾張守入道と

名乗つたが、三代氏康から

の信頼は絶対で、「国政、軍

務の評議一席に列して其の

裁判を司る」(古戦録)よ

うに命ぜられていた。とこ

ろが元亀二年氏康が歿して

北条家を四代氏政が継いだ

頃から、氏政、憲秀の間に

溝が生じ初め、その間隙が

年とともに広く深くなつて

いった。主に長男新六郎の

問題からであった。

憲秀が長男新六郎を他家

に養子に出して、次男左馬

助に家督をつがせたのは何

故であるかというに、次男

の左馬助が頗る美男子で、

幼少の頃から氏政の近侍を

勤め、氏政が非常に寵愛し

て手元を離さなかつたが、

これは恐らく男色関係であ

つたようである。従つて氏

政は左馬助を愛するあまり

憲秀に対して、左馬助に松

田総家を嗣がせるよう相当

根強い内意があつたようで

憲秀も氏政の意を汲んで、

不本意ながら長男新六郎を

他家に養子にやつたのであ

るが、問題の根源はこの辺

のところを胚胎していたよ

うである。

しかも、新六郎が笠原家

に養子に入ると間もなく当

主笠原能登守に実子平左衛

門照重が誕生したから、能

登守も我が子可愛さに、実

子照重に家督を継がせるこ

とになつた。一方生家の松

田家は弟の左馬助が家督し

てしまつているので、新六

郎は生家にも帰えれず、止

むなく笠原家にとどまつて

同家の組子同心を附属せら

れた一隊八百名の頭を勤め

たけれども、彼の身がらは

まことに宙に浮いた形とな

り、心中不満やる方ないも

のとなつた。

父尾張入道はこの新六郎

を頗る憐憫した。この頃か

ら、才幹人にすぐれて賢明

な憲秀に微妙な精神動揺を

生ずるようになったのであ

る。

### 新六郎第一の謀叛

天正七年(五元)に甲相

手切れとなつて、武田勝頼

と北条氏政の対立が駿豆方

面で激しくなつたので、北

条家はこの国境線上にある

長窪城、泉頭城、獅子浜城

戸倉城などに各々錚々たる

武将を置いて守らせた。特

に戸倉城は武田側の沼津城

に対して最も重要な所であ

るといふので、権臣松田尾

張入道憲秀の息笠原新六郎

を城守として遣わすことに

なつたが、戸倉城以外の北

条方の城では、よく城を守

り、敵多数を打ち取つて、

その注進が統々小田原にと

どけられたのに、戸倉城で

は一向の手柄もなく二年間

も過ぎたので、氏政、氏直

父子から憶病者とのしられ

れ続けていくうちに、天正

九年十月になつて新六郎は

北条氏に謀叛して、武田方

に降服してしまつたのであ

る。「小田原記」に

「此新六郎、父祖にも武勇

の道劣るまじく思ひて、此

の城におかれけるが、思い

のみならず、功なくして忠実を願ひ、折にふれ不忠のみ多かりしかば、小田原にても、氏政、氏直俯し仰せらるる由を聞きしかば、新六郎内々不足に思い、時分あらば謀叛を起してんとためらいけり」

と一向に悪し様に記しているが「関八州古戦録」はこの辺の事情を詳しく述べて新六郎に同情を寄せる記事を書いている。その意はこうだ。

「戸倉城の附近は深水の地で、働き不自由な所であるから、新六郎は手柄をあげ得なかつたのである。これは氏政が悪い地形を知りながら態と功勞を挙げ難い方に彼を差し向けていたのである。そして後には新六郎を憶病者扱いにして「比狂尼殿」と異名をつけて呼び大将一人が柔弱だと士卒も亦同様だと、何かにつけて悪しざまに取扱つたのである。新六郎とても尾張守の子であつて、武勇も才覚も人に劣るものではなかつたとかく氏政父子の悪計にかつたので、今回心外にも武田氏に忠するようになったのである」と述べておる。

何れにしても新六郎の心中を見抜いた武田方では、沼津城主高坂源五郎が三島の心経寺の僧を戸倉城に遣わして、新六郎に武田方に味方するなら、伊豆一円の守護に任じ武田勝頼の弾にすると云うことで誘ひをかけたが、こんなうまい条件が容易に実現できる筈なのに、遂にこの甘言に乗つて北条方に寝返りを打つたのみならず、来攻した北条方と戦つて、義弟の笠原平左衛門を討ち取る始末となつた。しかしその翌年の天正十年(一五八二)三月には武田勝頼が織田信長に滅ぼされ、戸倉城も落城し、寄り所を失つた新六郎は再び北条氏政に降服したのである。氏政は怒つて、召し捕えて討首にせよとのことであつたが、父尾張守入道の嘆願によつて漸くにして死刑のみはまぬかれたので、出家して、父の領土足柄上郡河村辺に潜んで一時流浪しておつたのである。

溝深まる氏政、憲秀  
新六郎の事件は、松田尾張守入道憲秀にとつては、精神的にはもちろん、権勢の上にも大きな痛手であつた。そしてこの頃から太守と老臣、つまり氏政と憲秀との間の溝は、もはや塞ぎようもなくなつたように見える。

「一本北条氏康は人も知る寛仁大度の名将で、その赫々たる武徳はよく家臣をな

づけ、政治は条理を正し裁断厳正であつたので、威令は関八州に行われた。憲秀もより才幹のすぐれた人物であつたので、権勢があつてもこれを弄することなく、家老として政治にも忠勤をはげみ、各地の戦場でも抜群の勲功を挙げ、氏康からも篤い信頼を受けていたのである。ところが元龜二年(一五七二)三代氏康世を去つて、北条家は四代氏政の天正期に入つたが、氏政は残念ながら父氏康ほどの大器でなく、人心収攬の資に欠けており性格がむしろ憎愛の念の強い人で、そのため家臣の間に相當の動搖を与えることがあり、松田一家もそのあふりを喰つたものと云えるであらう。美少年松田左馬助に対する溺愛から、その兄で松田家の家督問題もある新六郎を憎み、これを故意にしりぞけて憶病扱いにしてしまつた傾きはなかつたか。そして、我が子新六郎を憐憫する憲秀入道に向つても、つばを吐きかける態度を示したのではないかとそれ故憲秀が最後に反逆を決行せんとしたときに「頃年両府君(氏政、氏直)入道に對せらるるに、前々の風情に違ひ、万事疎闊にして隔心の体たらく、我に於て憤り深しと雖も時

を得ずして過し来たれり」(関八州古戦録)と放言させている。笠原新六郎の一件以来、氏政と憲秀の間はますます隔心の度を深めたが、彼方は関八州の太守、北方は権臣と雖もその家臣であるので、隠忍して表にあらわさず、事なきを経て時代が過ぎたのである。

小田原北条家に大詰の日が来て、天正十八年(一五九〇)豊臣秀吉の十五万の大軍が小田原城を囲み、四月から七月まで猛攻したので、北条方は六万の軍勢で籠城して専守、力闘したが、実力の差は如何ともしがたく、小田原城の落城はもはや日時の問題となつた。この時松田尾張守入道憲秀の謀叛が起つたのである。馬鹿な子ほど可愛というが、父憲秀にとつて不慮の子であつた松田新六郎政堯は、一旦頭を割つて父の領土の足柄上郡河村の地に数年ひそんでいたところ、いつしかまた還俗して父のもとに姿を現した。

折節、天正十八年の小田原籠城の時であつたので、これを利用して復活を試み父を通じて籠城の人数に加えられるように、そして忠勤を励みたまき旨を懇請して

来たのである。しかし北条氏政は全然これを受け入れず、このような大事の時期に比丘尼は不用であると極言して、冷酷に斥けたので憲秀父子は全く面目を失墜したのである。憲秀はここに自製の度を失ひ、悲憤して遂に反逆を決意するに至つたのである。この小田原戦役には、松田憲秀は一族とともに一万三千余人の軍勢を率いて早春三月、箱根宮城野に陣を張り、別に一族の松田兵衛太夫康長は箱根山中城主に任ぜられて、授將北条氏勝の軍と合せて四千人でこの城を守つた。これが松田一族のこの戦役当初の配備であつた。

天正十八年三月二十九日秀吉の総軍は箱根全山を蔽うて雲霞の如く小田原に向かつて進撃を開始したので北条方の箱根各所を守る軍勢は、その威に圧せられて皆退いて小田原に籠城した。松田憲秀もその例に漏れず小田原に引き上げて、籠城戦中に八千七百人を率いて城の西南早川口方面の二重外張口、大窪口を守つていた。ところが、笠原新六郎が氏政、氏直に許されて父の単独の計いでか、勝手手の押し入りかわからぬが松田勢の中に加わつており一方の旗頭として二重外張

口に陣取つていた。そして謀叛はここで計企されていたのである。一方箱根山での山中城戦は熾烈を極め、豊臣方の一万八千余の軍に四周から猛攻をうけて、松田康長と間宮豊前守とが、逃げ残つた二百人の決死隊をもつて敵中におどり込み、遂には一人残らず城を枕に壮烈無比な討死をとげた。時に三月二十九日の正午であつたが城主松田康長は戦開開始に先立つて死を覚悟しての書翰を、家門の総帥松田尾張守入道に贈つて

「某小身の身をもつて運を開くこと能はず、然れども名字を汚すことなき印には、討死をとぐべし」(小田原記)と述べているが、その書翰を受け取つた松田憲秀が一方で豊臣秀吉に内通して主家北条氏を倒そうという反逆の計を画しつゝあつた時であつたのは、如何にも皮肉な次第である。

憲秀が豊臣方に内通したのは、戦が始まる以前からで、秀吉が石垣山に本陣を築いたのも、彼の誘導によるものであると伝えられているが、これは事実ではないようだ。

謀叛の計画が表面に出たのは、籠城も三ヶ月近くになり、落城か降服か日時の

口を陣取つていた。そして謀叛はここで計企されていたのである。一方箱根山での山中城戦は熾烈を極め、豊臣方の一万八千余の軍に四周から猛攻をうけて、松田康長と間宮豊前守とが、逃げ残つた二百人の決死隊をもつて敵中におどり込み、遂には一人残らず城を枕に壮烈無比な討死をとげた。時に三月二十九日の正午であつたが城主松田康長は戦開開始に先立つて死を覚悟しての書翰を、家門の総帥松田尾張守入道に贈つて

「某小身の身をもつて運を開くこと能はず、然れども名字を汚すことなき印には、討死をとぐべし」(小田原記)と述べているが、その書翰を受け取つた松田憲秀が一方で豊臣秀吉に内通して主家北条氏を倒そうという反逆の計を画しつゝあつた時であつたのは、如何にも皮肉な次第である。

憲秀が豊臣方に内通したのは、戦が始まる以前からで、秀吉が石垣山に本陣を築いたのも、彼の誘導によるものであると伝えられているが、これは事実ではないようだ。

問題となった六月八日のことと、新六郎のしつこい勧めに従って意を決した憲秀は、この夜陣中の一所に長男新六郎政秀、次男左馬助秀治、三男弾三郎秀也の三人の子息を呼びよせて謀叛の計画を打ち明けたのである。

その語るところによると憲秀は初め石垣山麓に陣を張っている秀吉の腹心堀秀政に通じて内応の計画をすすめたが、秀政が病死したので、その後は板橋、風祭方面に陣している細川忠興と黒田秀高を通じておるそして北条氏滅亡後は伊豆相模二ヶ国を秀吉から拝領するといふ墨付をもらい、日時を期して池田、細川、黒田、堀の豊臣方諸軍を、自分の持口から引き入れてそれと同時に松田軍も反旗を挙げて城中に突入しようという計画であるといふのであった。

この計画が秘密に三子に漏らされたとき、長男新六郎は、父に謀叛を勧めた者ゆえ、一も二もなく賛成したが次男左馬助は全く驚愕したのである。

左馬助は幼年の頃から氏政に寵愛を受けて、昼夜その膝元を去ることなく暮しを受けても他人に異る昵近を愛もった身であったから、今初めてこの秘密計画

を聞かされて、心気動転した、落つる涙をおさえて諫言につとめたけれども、父と兄との怒を買うのみにくはれなかった。

左馬助は力及ばず「左程に思い極め賜う上は、ともかく父命に任せ待るべし」と言って父の怒りをなぐさめたとはいはれてい

二回目の謀議が六月十四日の晩景に、茶会の催しの際で行われて、三子と憲秀の娘婿の津久井城主内藤左近大夫、憲秀の弟、松田肥後守康光とが招待されて加わったのである。

そして憲秀から明日(十五日)の夜に入って豊臣氏を城中に引き入れようといふ語られたのである。この時にも二男左馬助秀治が反対して、十五日といふ日は昔から「不成就日」といって、物が成功せぬ日とされているから、十七日に延期すべきだと強く主張したので、そのようにしようとする議は決定した。

次男左馬助、鑑權に隠れ脱出して注進

左馬助は、このようにして日時を延ばしておいて、その間に、本丸に置いてある自分の着料の鎧が必要になったからと、近侍の者を遣わして取り寄せさせ、

今度はその鎧の入れであった具足櫃の中に自分が這入って、近侍の者に背負わせ父兄の見張りを逃れて、真夜中に陣中から城内本丸に入ったのである。そして氏政、氏直に謁見して陰謀を内訴して、父の助命を泣訴したのであった。

氏政、氏直は大いに驚いて、翌十五日憲秀を陣中から本城に呼び寄せて、厳しい詰問をしたので、憲秀も遂にかくし得ずして白状したので直ちに捕えて禁獄した。笠原新六郎は再犯の重科であるから即日斬首とな

しかし、小田原城の運命はずでに急迫しておいて、これより二十日後の七月五日には、北条氏直が城を出て、今井の陣にある夫人の父、徳川家康のもとに至って降服を願ひ出たから、秀吉これを入れて、明六日開城することを命じたのである。

天正十八年七月五日、この日は松田憲秀の最後の日であった。氏直は明日開城に先立って、この日禁固中の憲秀を目前に呼び出して「今度の乱根ひとえに汝のなす所なり」と罵って、自ら刀を振って憲秀の首を打

秀治はどうなったか。彼の泣訴にかかわらず父憲秀の助命はついに成らなかつた。しかし、北条家には無くてはならぬ忠勤の士として、小田原落城後も北条氏直は彼を離さず、高野山に追放になった時、三百人の從者、筆頭一人として連れて行ったのである。さて、松田尾張守反逆事件で、左馬助が主君の忠節を全うせんために父を滅ぼすに至ったことについては古来史家がその批判に迷うところであつて、「関八州古戦録」にも「今案するに左五郎が伝に大義滅親という辞あり、今左馬助が振舞、忠貞余りありて、不孝甚し、いずれを是とし、何れを非とせんかは後世判断すべし、我あえて論ぜず」と云っている。その後長く生きながらいた左馬助はどんな心境で日々を暮らしていたのだろうか。しかし事實は、高野山一高室院文書によると、彼の書いた書状に松田三衛門尉直憲という名前が度々出てくるが、小田原落城を期に左馬助秀治を名乗らず三左衛門直憲を称するようになったらしい。また号を哲齊と名乗ったので、松田哲齊の名でもあらわれている。氏直に最後まで近侍して北

条氏再興に非常に努力したが、天正十九年十一月四日氏直急死にあい、またも三百の從臣一挙に離散の悲運にあつて、行方不明に彼は、当時洛中であつた氏直未亡人の督姫を頼ってこれに仕え、督姫が池田家に嫁したので、池田家々臣として中国に去つて行ったのである。現在山陽、山陰に松田左馬助後裔を称する家の多いのはこのためである。

北陸の金沢地方にも松田氏後裔といふ家柄が多いがこれは面白いことに小田原城中に死んだ管の尾張守末子彈三郎秀也が生きていて北陸に入ったもので、その子孫の人々だと伝えている。

さて最後に憲秀についてもう一言するが、彼と長男新六郎とは大逆人として誅殺されたのであるし、その翌日には小田原城が落城したという大騒ぎの中だから彼等の遺体は丁重に葬られた訳でなく、墓石とても別に當まれたのではなかつたであろうから、今になつてその正墓を探すといふことは無理だと思ふのだが憲秀の反逆を考えると、何か一脈の哀れさがあつて、正墓を見付けたい気持で一ぱいだが、どうしても見つからない。もし次男左馬助秀治が父を弔っているとしたら

どこへ遺体を埋葬したのであるうか。一つの候補地は足柄上郡(南足柄市)塚原の玉峯山(長泉院(曹洞宗))である。ここは松田氏の知行地で、寺は松田憲秀が氏寺同様に保護を加えた名刹で、松田憲秀制札状と朱印状の二点があり、左馬助秀治書状(秀治の別名直秀となつている)も二点あつて松田家文書のあるのはこの寺だけである。しかし墓はない。今一つは、足柄上郡狩野(南足柄市)の上関山極楽寺(曹洞宗)でもこの憲秀の直願で、寺は憲秀の中興開基である。ところが、ここに松田尾張守憲秀墓といふものがある。しかしこの墓は憲秀の二十五回忌に建てたもので、寛永十年五月十一日の文字がほのかに見える。「新編相模風土記」が云っている。果して憲秀の供養塔であるか明らかでない。また、足柄上郡山北町岸にある室生山般若院は、寺記によると憲秀の折願寺で憲秀の「御屋形」といふものが近くにあつたと伝えている。山北地方は憲秀の本領であるから寺伝は正しかる。新六郎が出家して一時潜んでいたといふものも寺であつたらしい。しかし、憲秀の墓はここにも見当たらない。

小田原城内のどこかに死  
刑後ひそかに埋められたも  
のであったろうか。

# 小田原城合戦に まつわる美女達

(一)徳川家康の愛妾お万の方  
小田原城中に誕生

徳川家康は稀代の女好き  
で、生涯に二妻十五妾を持  
ったと言われるが、その中  
でもお万の方は、最も寵愛  
を受けた女性の一人で、家  
康の第十子の紀伊大納言頼  
宣と第十一子の水戸中納言  
頼房を生んだので、頗る権  
勢を振ったので有名な婦人  
であるが、彼女の誕生は必  
ずしも幸運でなく、母とと  
もに小田原北条氏の滅亡の  
悲劇の中に流転した経歴を  
持っている。

お万の方の出身について  
は、「以貴小伝」の中に、  
「おまんの局は、正木左近  
太夫邦時が女なりしを、蔭  
山長門守氏広おのが娘にし  
て、東照宮に参いらせしに  
より、蔭山殿とぞ申しける  
邦時は女房の里見氏に仕え  
て上総国勝浦の城に居れり  
天正の頃、邦時勝浦を去り  
し時、おまん殿を蔭山氏広  
に与えけり。氏広は小田原  
北条が被官なりしが、天正  
十八年北条氏の滅びし時、  
伊豆国賀殿という所にひき  
こもりぬ。これより先おま

の素姓を記した有名な記事  
であるが、これらによつて  
お万の方は、正木左近邦時  
の娘で房総の上総国勝浦に  
生れ、後に伊豆国の蔭山長  
門守氏広に養われて育ち、  
更に徳川家に仕えて家康の  
側室になったのであるとさ  
れているのが一般であるが  
この再記録には誤りが多く  
お万の方の誕生地も上総と  
あるが、実は小田原城中で  
あった。

さてお万の方の実父であ  
る正木左近太夫と云う人物  
であるが、正木家は鎌倉時  
代以来三浦半島の豪族とし

て知られる三浦氏の一族で  
三浦介時高が、明応三年(一  
四九四)に養子の義同(道守)  
に攻め滅されたとき、時高  
の一人時綱が逃れて安房の  
国正木郷に土着して正木姓  
を名乗ったのが始祖であつ  
た。正木家は以来里見氏に  
所屬して代々上総国勝浦城  
主となつていたが、里見氏  
と小田原北条氏との連年の  
交戦のために、北条氏の圧  
力にたえかねて正木時忠が  
永祿の初め、里見氏に叛い  
て小田原北条氏に属するこ  
とになつたのである。この  
正木時高の五長が正木左近  
太夫頼忠、初名邦時と言つ  
てお万の方の実父である。

頼忠は小田原北条家の北条  
治部大輔氏隆の娘(性珠院  
)と結婚してお万の方を生  
んだのである。

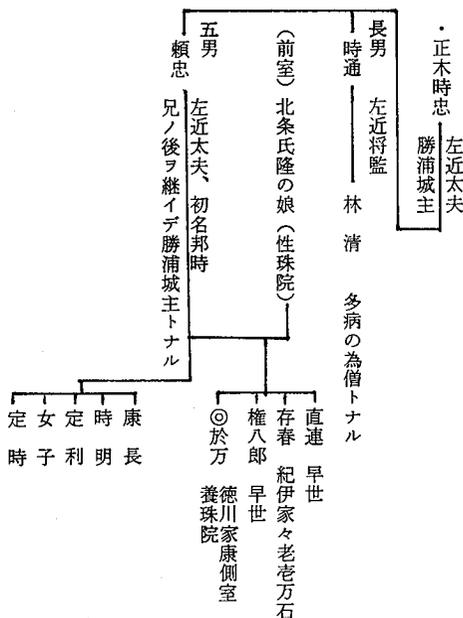
お万の方の生母性珠院の  
父は正木家の文書によると  
小田原北条氏の一族、北条  
治部大輔氏隆で、後の入道  
大関齊のことだとある。北  
条家の文書には、大関齊は  
北条家三代の太守氏康の六  
男で、四代氏政の弟に当る  
北条氏忠のことと、氏忠は  
北条家が栄えた頃は下野国  
佐野家を継いで佐野左衛門  
佐と名乗って佐野城主であ  
つたが、晩年大関齊と名乗  
つた人物であつた。一時氏  
忠を名乗つたことがあるが  
氏隆とも称したことがある  
らしい。それ故、北条氏忠  
はお万の方の母方の祖父で

方では、頼忠の父時忠が没  
して長兄時通が家督を継ぐ  
と、また里見氏に復讐した  
が、この人には男の一子で  
あつたが病弱であつたので  
林清と名乗って少年期に早  
く僧籍に入つてしまつたの  
で嗣子がなく、天正十四年  
時通が歿したとき、頼忠が  
正木家の跡を継ぐことに  
なり、小田原へは自分の次  
男為春を代理人人質として  
留めて故郷に帰つてしまつ  
たのである。

頼忠は帰国後勝浦城に入  
つて里見義頼、義康に仕え  
たが、北条氏と不和な里見  
氏に所屬しては北条氏出身

とあるが、女の子の名を於  
一院お万の方となる女性であ  
万といつてこれが後の養珠  
る。参考に正木氏系図略を  
記そう。

## 正木氏系図略



の婦人を妻とすることが不都合になったらしく、いつしか北条夫人と離別して、里見義頼の娘と再婚して、この後室との間に康長、時明、定利、定時の四男と一女を挙げている。前室北条夫人との離別は、天正十四年の掃部の際とも云はれ、天正十八年小田原北条氏滅亡を機会にしたともいわれている。年月が明確でないけれども、天正十四年説の方が正しいように思われる。

(二)お方の方、母とも  
伊豆に流転す  
実父に去られた後のお方の方は、母とともに外祖父北条氏忠の庇護を受けて小田原に住んでいたが、天正十八年の小田原城の落城と北条一族離散の悲運に際会して、祖父氏忠が高野山に追放になった宗家氏直に従って西行しなければならなくなつたので、彼女は母とともに小田原を落ちて、伊豆に流転することになったが、時にお方の方は十一才の少女であつた。伊豆に行つたのは、北条氏の旧臣蔭山長門守氏広をたよつたのである。

蔭山氏は清和源氏足利家の一族で、関東管領足利持氏の七男が、永享の乱のとき父は滅ぼされたが、その時三歳で、家臣に援けられて伊豆の南に逃れて小田

原北条氏に仕えた、長門守氏広の父刑部左衛門尉忠広が蔭山の原木百貫文の地を領したことが、「小田原所領役帳」にも見えているが、氏広の居城は河津郷笹原で今も居城址と伝える所がある。

お方母子が蔭山氏を頼つたのは、北条氏滅亡と同時に里見氏も豊臣秀吉によつて上総國を没収せられたので、正木頼忠は勝浦城を去つて故郷の房州に帰り、成川村字岡谷といつたところに隠遁したので、小田原在住當時からの昵懇であつた蔭山氏広に不運になつた先妻とその娘とを託したものであるといひ、また一説にはこれより以前頼忠は里見義頼と争つて敗れて伊豆に逃げ、蔭山氏に妻子を託し、自分は安房に帰つて義頼に降服して隠遁したのであるといひ或は、天正十八年に北条氏忠が高野山に赴くと、昵懇の蔭山氏に娘の北条夫人と孫娘のお方の方とを託したのであるといひ、その何れが正しいのか明かでないが、要するに蔭山氏広が、この母子を引きとりお方の方の母を自分の妻としたのであつた。

この時、蔭山氏広はすでに先妻を亡つていたのであろうが、お方の方の母は、前夫との間に四人の子供を

生んで離別をした女だからこれを後室に迎えたのは、なお色香の失せぬ美女であつたのではないかと思う。(三)お方の方、家康の愛妾に  
蔭山氏広が養女となつたお方の方を家康のもとに差し出して宮仕えさせたのは「以貴小伝」のお方の方略伝の割注に、「おまんどの六、七歳にて宮仕にまいられと云々」とあるが、彼女の六、七歳の頃はまだ蔭山家に入つておらず、北条氏も栄えていた時で、小田原に住んでいたのであるから、この記事は誤りで蔭山氏の養女となつた十一歳以後のことであろう。

お方の方の母性殊院は蔭山氏の後妻となつて間もなく一子吉千代を生んだが、吉千代が後の蔭山因幡守であつた。しかし母はその翌年の天正十九年(一五九二)八月七日に世を去つてゐる。薄命の女性であつた。そして娘お方十二歳であつて、恐らくこれより間もない頃に徳川家に宮仕えに送られて行つたのである。何れにしても彼女は恐らく絶世の美女であつたので、間もなく家康の目にとまり、数多く側室において最も寵愛を受けるに至つたのである。

徳川御三家  
二家を生む権勢

さて、徳川家康は慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の戦に大勝を博して、同八年には江戸に幕府を開いて天下の政權を掌握した。お方の方の寵愛もこの頃絶頂に達した。慶長六、七年の交、お方も伏見城に置かれた。そして慶長七年三月七日伏見城中で家康の第十子常陸介を生んだ。これが後の紀伊大納言頼宣である。お方の方二十三歳の時である。翌慶長八年八月十四日同城中で、お方の方は二十四歳で第十一子鶴千代を生んだが鶴千代は後の水戸中納言頼房である。兄の頼宣は生後わずかに一年八月で水戸藩主になり、更に八歳で駿府城に転じて駿河、遠江の二國を領し、間もなく和歌山城主になつて紀伊大納言家を開いたが、弟の頼房は兄頼宣の駿府入りと交代して七歳で水戸藩主となつて水戸中納言家を起こした程の兄弟であつたから、徳川御三家中の二家も生んだお方の方の権勢を振つたことが察せられる。

家康が大御所となつて駿府城にあるときは、お方の方はここで家康にかしづき住んだ。元和二年家康が七十五歳で駿府城に歿したとき、お方の方はまだ三十七歳の女盛りであつた。

その後は自分の生んだ紀伊大納言頼宣にかしづかれ安楽な後半生を送り、承応二年(一六五三)八月二十七日七十四歳で大往生とげられた。

養珠院逸事  
養珠院お方の方は日蓮宗に帰依して、いろいろな営みを行つてゐるので、同宗の寺院には彼女の逸事、遺品を伝えるものが多い。菩提寺として知られてゐるのは、甲州身延大野にある本遠寺、静岡市内にある蓮永寺と紀州和歌山の養珠寺の三寺である。

本遠寺はお方の方が生前に再建した寺院で、寺では遺体はここに葬り、後に一部を本遠寺に改葬したのでと云へてゐる。この寺に行つて彼女の墓石を見て驚いたが、宝篋印塔の高さ三メートルの豪華なもので、同墓地にある古今の名士達の群墓から一際抜擢出て、あたりを圧している。生前の彼女の権勢がしのばれる。養珠寺は長男の紀伊大納言頼宣が、母の菩提寺として建立したもので、養珠院妙紀日心大師というのが彼女の法号である。

小田原はお方の方が誕生して十歳前後まで住んだところであるが、その遺跡はないが、伊豆に行くとき、お方の方が残つていて有名である。それは河津温泉郷の河津町のまん中で、お方の方の母が小田原から娘を連れ子して来てつた蔭山氏再嫁したときの、蔭山氏居城の跡らしい。蔭山氏没落後、お方の方の正木一族のものが住んで今日に至つた。また庭内の大蘇鉄は日本一と称せられてゐる。蔭山氏は北条氏の滅亡のとき、豊臣軍の伊豆水軍に攻められて、河津郷笹原の城山にあつた堀城が落ちて、一家は修善寺の加殿に逃れ、勿論お方の方も養父とともに一時ここに住んだ。しかし、後こ

も去つて沼津の三枚橋に移つたが、お方の方が家康に召し出されたのは、ここからであつた。召し出されたといふのは、実は蔭山氏の沈淪を見かねて、蔭山代官江川氏が名目上の養父として差し出したのであつた。(つづく)

此の会報も発刊以来百号を迎える事が出来ました。厚く御礼申し上げます。今後とも益々原稿を賜ります様御願ひ申し上げます。杉崎

編集部より

この会報も発刊以来百号を迎える事が出来ました。厚く御礼申し上げます。今後とも益々原稿を賜ります様御願ひ申し上げます。杉崎